

在インドネシア日本人会から

岐路に立つメダン 日本人会

メダン日本人会理事長
青山 滋弥



2021年4月に開かれたメダン日本人会理事会で理事長に就任した青山氏（前列左から2番目）

縁あって本年4月からメダン日本人会（MJC）の理事長を務めることになりましたが、メダンも例外ではなくコロナ禍の最中にあり、MJC 会員は現在 40 名程度の小さな団体ですが、従来の活動からの変革を迫られています。メダンの歴史や日本との関わりを今一度振り返った上で今後を考えたいと思います。今、MJC は大きな岐路に立たされています。

●メダンという土地柄

「メダン」は普通名詞では「広場」という意味で、オランダ領東インド時代に商品作物の集積地として発展したようです。もともとはマレー人の小村で、1590年に「カンブンメダン」が出来たとされ、メダン市は今年で431年とされています。

19世紀後半になると、欧州の資本によりタバコ、ゴム、茶などのプランテーションが開発され、スマトラ島北部の中心地となったようです。プランテーションの拡大に伴い、域外から多数の華人、ジャワ人の移民労働者が入り、人種的にも言語的にも宗教的にも非常に多様性に富む文化が形成されています。

●戦前のメダンと日本人

日本との関係ですが、明治中期から大正にかけて500人から600人のからゆきさんがいたとされ、1928年（昭和3年）には日本の領事館が開設されています。戦前の写真収集で著名な青木澄夫教授によれば、「メダンはシンガポールとの関係が密で、早くから日本人が多数在留した」とのことです。

1937年（昭和12年）頃の日本人の集会の写真を見るとネクタイ姿の男性に加えて子供たちや多数の和服姿の女性も加わり、数百名は参加されている盛況ぶりです。青木教授によれば「1920年頃には北部スマトラ一帯で少なくとも20数店の写真館が存在した」とのことです。北スマトラ州内ではメダン市内に限らず隣接するピンジェイやルブック・パカム、終戦後に日本軍の武器の譲渡をめぐる衝突事件が発生したトウビン・ティンギ、トバ湖へ向かう街道の途中にあるブマタン・シアンタールなど、またアチェ州内に入りメダンからバンダ・アチェ（約600キロ）に向かう街道の町、ランサやロスマウエ、州都バンダ・アチェの対岸の島であるサバン島にまで日本人による写真館が広く存在していて、同胞の活動が活発だったことが窺えます。

メダンには昔から地元の名士たちのみを会員とする「メダンクラブ」が存在しますが、そのクラブは現在、日本軍政下時代の神社をクラブハウスとして利用しています。戦時中、メダンには近衛師団の歩兵第三連隊の司令部が置かれていました。

●戦後のメダンと日本人

戦後、国交回復後の1960年（昭和35年）に領事館が再開され、1973年には戦後荒れ果てていた日本人墓地の移転・整備が行われました。現在、納骨堂には明治時代含めて300柱を超える遺骨が安置されています。

戦後特記すべき事業は、日本政府と民間企業が総力を挙げて取り組んだ「アサハプロジェクト」です。世界最大のカルデラ湖であるトバ湖から流れる落差の大きいアサハン川に発電用のダムを建設し、そのダムで発電した電力を利用してマラッカ海峡に面した地にアルミ精錬工場をつくりアルミを生産するという壮大な事業です。ダムを作る案はオランダ時代からあり、1960年代にソ連が計画したものの頓挫し、日本がアルミ精錬工場とセットで提案して、1975年から建設が開始されました。

私は過去2度にわたりメダンで勤務したことがあります。最初に勤務した1982年から4年間の時代は、日本人社会は大変活気がありました。メダンを代表する財閥が経営するホテルの敷地内にはMJC専用のクラブハウスがあり、専属の職員も雇用し、手作りに近いものですが「メダン便り」と冠した月刊誌も発行されていました。日本からの駐在員に加えて、元日本留学生や元日本兵の方々も随所で活躍されていて、今でもお名前やお顔を思い出します。

アサハプロジェクトに関係する日本企業関係者や日本政府の技術協力事業関係者など多数の邦人が居住していたため、メダン市内には1980年に日本人学校が設立されました。その後、1984年11月に「アサハプロジェクト」は完工、1998年には日本人学校は休校となり、2002年には廃校となりました。

●コロナ禍前の活動

この廃校に伴う整理の中で若干の資金が残ったため、学校設立関係者の同意を得てMJCの中に4億ルピアの「日本スマトラ文化交流基金」が設けられました。この基金から生じる利子益を活用してMJCは毎年、日本語弁論大会、大学の日本文化祭、日本文化講座などを支援してきましたが、昨年の新型コロナウイルス発生により、かかる支援活動はほぼ開店休業状態となりました。

また大変悲しい出来事ですが、本年5月30日には当地で年金生活を送られつつ、地元の学生さんたちに笑顔で日本語や書道を教えてこられたMJC会員の成田克美さんが新型コロナウイルスに感染され逝去されました(享年82歳)。この場をお借りして、成田さんの活動に深く感謝するとともに心より哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りしたいと思います。

●これからの活動

昨年2020年3月にメダンでもコロナ禍が始まり、以降全く手も足も出ないダルマさん状態を強いられているMJCですが、本年4月の第1回理事会では、「デジタル時代とコロナ禍の現状を踏まえて対応しつつ、今後のMJCのあり方を検討する」ことを今年の活動方針としました。この方針に沿い、MJCの土台となる各種規定、会員規定、連絡の有り方、財務などを見直しつつ、時代に即した活動はどうあるべきか、単年ではなく中長期的な時間軸も視野に入れた議論を現在行っている最中です。

幸い、MJCは先人が遺してくれた「スマトラ文化交流基金」を有し体力があります。増額してないので、大分目減りしてはいますが、この体力のあるうちに必要な改革をしたいと思います。MJC内の議論を踏まえた上でメダンにゆかりのある方、メダンにご関心のある方にも今後お声をかけさせていただくようなこともあろうかと思いますが、広く皆様方からもご意見、ご助言、ご支援を賜りつつ、邦人の間で、また邦人と現地の方々との間で新たな「広場」が構築できればと思います、取り組んでいます。

青山 滋弥 (あおやま・しげや)

サガミエレク社・サガミインドネシア社顧問、メダン日本人会理事長

元外務省員。外務本省でインドネシア班長を務めた他、インド洋大地震津波発生の際には緊急援助隊長を務める。ジャカルタ、メダン、デンハーグ(オランダ)、バンダールスリブガワン(ブルネイ)、台北(台湾)、上海(中国)にて勤務歴あり。